

卒業制作 小論文

## 私の家のしまい方

八丈島の実家を通して考える建築の終活

12106001 浅沼 寒雪

### 建築の「しまい方」

1. はじめに
2. 私が故郷・家に求めること
3. 火葬を選択したねらい
4. 実験と考察
5. まとめ

### 最終表現について

1. はじめに
2. 火の持つ力と家が内包する記憶映像
3. 私自身が目で見たリアル
4. 私の人生を投影した等身大の展示
5. まとめ

本研究・最終表現を通して（あとがき）

## 建築の「しまい方」

### 1. はじめに

私の故郷である八丈島では、人口減少と高齢化による空き家が多数存在する。この問題は幼いころから耳にしているものであったが、具体的な解決策や取り組みを目にしたことはなかった。

空き家は一般に、早急に取り壊すべきもの、もしくは新たに活用されるべきものとして認識される。理由として、空き家の維持に膨大なお金を要することが挙げられる。特に八丈島では交通手段が限られることから、その費用に難色を示す人間も多い。これらの理由から、所有者が適切な管理を行わず、空き家が廃屋化することも珍しくない。

しかし私は、私の実家が空き家となっても、早急に取り壊したり、新たに活用したいとは思えない。それは私が、故郷へ帰りたいたいと考えるからである。八丈島が私の故郷といえる理由は、そこに家が在り、その家に住んでいたからである。その家が存在しなくなった故郷には、訪れることは可能でも帰ることはできなくなる。家は故郷を形成し、帰属意識の根源となる。

ところが、家を存在させ続けることは不可能である。いつかどこかで、家を手放す選択をすることもあるだろう。私が家を手放す時、つまり故郷を手放す時、私はどのように、家を扱うべきだろうか。

本稿では、この問いの答えが「火葬」であると考え以下に詳述する。

### 2. 私が故郷・家に求めること

私は島に対しても、家に対しても、自分が過ごした時から「変わらないこと」を望んでいた。毎年帰省すると、故郷の変化が目に着き、寂しさを感じた。具体的には、小学校からブランコと登り棒が消えていたこと、幼い頃に遊んだ小川がコンクリートで固められること、しばらく閉まっていた商店がカフェに改装したこと、などである。対して家はほとんど変わらぬままであり、私はそれに安堵していた。4年前から、私が使用していた家具、雑貨、本棚、その全てを、親はなにも動かさない。良いことも悪いことも、思い出すきっかけが全てそのままそこにある。「変わらないこと」が親によって保たれていた。これは管理する人間が居なければ成り立たないことを認識した。

では「管理する人間のいない家(空き家)」となった私の家が、私の記憶から「変わらない」ためにはどうすればよいか。私はその手法として火葬を選択した。

### 3. 火葬を選択したねらい

火葬を選択したいばんの狙いは、燃え尽きることでその姿かたちが失われることである。私は私の家が「変わらない」ことを望む。つまり、リフォームやリサイクルは私の意に反する行為である。私の家が、私の知る家であるうちに、その姿かたちが失われれば、私の記憶から「変わらないこと」が達成できると考えた。

次に、実家に対する情報の付与が挙げられる。「家を思い出す」という行為は、自然と視覚情報に限られているように思う。何かを聞いて、何かを嗅いで、家の音・匂いに近いと感じることはあっても、ゼロから家の音・匂いを思い出すことはできない。家を燃やすという行為には、明確な音と匂いが存在する。家に対する情報を明確化し増やすことで、家を手放す行為が、自分とより密接な、五感を通じた体験へと昇華できるのでは無いか。

最後に、家の所在の保存が挙げられる。前述にて家が故郷を形成すると述べた通り、家と土地は組みでなくてはならない。例えば、自分の部屋で机に向かうと東側の窓から風が入ってくる、というような、周りの環境を全て含めたものが家である。家の姿かたちが無くなったとしても、その土地にあったこと、つまり、家と土地の結びつきはなにかしらの形で残さなければならないと考える。燃やすという行為は灰がその土地に残るため、家が土地へ還り、混ざり合うことで私の家を故郷へ埋め込むことができると考えた。

ねらいを設定後、火の持つ力が大きく、火単体の魅力や恐怖があらゆる事象を上回ってしまうのではないか、という懸念が生まれた。

#### 4. 実験と考察

前述したねらいが適切に働くか否か、3回に渡り火葬実験を行った。以下はその記録である。

##### A. 自身が制作した家具の火葬

目的：形状変化による愛着の行く末を確認する。

結果：姿かたちが失われた灰にも愛着が沸き、その愛着は火葬前よりも増加する。

考察：私にとっての愛着は、そのものと過ごした時間である。また、その時間は苦勞であればあるほど愛着の増加に影響する。

##### B. 他者が制作した模型の火葬

目的：愛着のない他者の制作物を実験Aと同様に扱った時、愛着が生まれるのか確認する。

結果：愛着は生まれない。しかし、燃える様子は美しく感じ、ものが形を失う瞬間を見届け

たという責任感を得た。

考察：実験Aと同様に苦労したものであったが、愛着にはたどり着けなかった。また、どれだけ時間を過ごしても愛着を抱くことは無いと感じた。愛着には0から1を生み出す時間が必要で、既に10出来上がっているものとどれだけ時間を重ねても、そこから生まれる愛着には限界があると感じた。

### C. 他者が制作した小屋の火葬

目的：家と呼べるリアルスケールの火葬を体験し、自身と他者でどのように見え方が異なるのか確認する。

結果：実験の中で初めて燃える様子が怖いと感じた。しかし小屋の制作者に、怖い、悲しい、寂しい、等の感情を抱く人間はいなかった。

考察：火葬の様子を見て得る感情は、ものへの愛着が影響する。喜怒哀楽の中で「喜・楽」をプラス、「怒・哀」をマイナスの感情としたとき、愛着があれば、その力が火の力に打ち勝ちプラスの感情を得るが、無ければ打ち負けマイナスな感情を得る。

3回の実験を通して、懸念点はものへの「愛着」によって解消された。また、燃え残った炭に近づいた際の香りは、当時の様子を連想させ、炭が視界に入る度、火葬、という行為を実施した達成感や、ものへ向き合うことができたという安堵感を得た。

以上の結果から、火葬によるねらいとして設定したものは正しく達成される可能性が高いと言える。よって「管理する人間のいない家（空き家）」が「変わらない」ための方法として、火葬は適している。

## 5. まとめ

本稿では、私が家を手放す際の「私の家」の扱い方として「火葬」が適していると考え、以下のように述べた。

私は故郷に対しても家に対しても、私の記憶から「変わらないこと」を求めている。故に、変化が起きる前にその姿かたちを失う火葬を選択する。燃える行為には視覚情報に加えて聴覚・嗅覚情報が加わるため、家を手放す行為が五感を通じた体験へと昇華される。また、灰が土地と混ざり合うことで、家と土地の関係性がより強固となり、家の所在の保存が達成されると考えた。これらのねらいは3回に渡る実験の結果から、正しく達成される可能性が高いと言える。よって「管理する人間のいない家（空き家）」が「変わらない」ための方法として、火葬は適している。

## 最終表現について

### 1. はじめに

最終表現としての空間は、私の研究を通じて、他者が自身の家について考えるきっかけを与えることを目的として制作した。空間を構成する3要素として「家が内包するもの」「『建築が燃える』ということ」「等身大の『私事』」を挙げ以下に詳述する。

### 2. 家が内包するもの

故郷の実家模型を制作し、実験から得た火葬映像をプロジェクターで投影することによって、家の火葬を表現した。また、模型は骨組みと建具のみで構成することで、映像を投影した際にできる影から「家の炭」を意識できるよう制作した。映像には、私の幼少期が差し込まれ、家が内包する私の記憶と思い出を、鑑賞者へ意識させる。鮮明に映像が確認できるよう、同じ映像を同時進行で別モニターに映し出している。

### 3. 「建築が燃える」というリアル

中央にはリアルスケールの梁の炭が設置される。模型の上部に設置することで、その炭が「家」を形成していたことを鑑賞者へ意識させる。また、その影がプロジェクターを通して壁面上部に映ることで、壁面の映像が「家」の中で起こっていることを強調させる。

別モニターには過去の実験映像が流れる。メイン映像では伝えきれなかった火の広がりやものが形を失っていく過程、立ち昇る煙など、私が実際に目で見えた視覚的な魅力が集まるよう意識した。

### 4. 等身大の「私事」

壁面に投影する文章を手書きすることにこだわった。本研究は常に「私事」で話が進んできた。タイトルにおいても、私事であることを意識したものになっている。私は私の家しか知らないし、知りえない。だからこそ、故郷である八丈島で18年を過ごし、今ここで、この卒業制作に取り組んでいる等身大の私自身を伝えるための、表現の一助になることを期待している。

### 5. まとめ

本空間では、私の研究を通じて、他者が自身の家について考える、きっかけを与える空間

として以下のように述べた。

「家が内包するもの」として実家模型に幼少期の映像を差し込み、鑑賞者へ家の内側を意識させた。「『建築が燃える』というリアル」 として、リアルスケールの梁の炭を設置し、火の映像に関しても、自身で撮影したものを使用した。「等身大の『私事』」として、手書きの文字にこだわり、より私に限った話であることを強調した。

## 本研究・最終表現を通して（あとがき）

本研究に伴い、三島由紀夫の金閣寺を読んだ。その際に、帰省するたび感じていた「自身と現実との乖離」の答えを見つけた。金閣寺の主人公は、絶対的な美の象徴として金閣寺を位置づける。しかし、実際に見る金閣寺は自身の思う金閣寺と乖離しており、その美しさを手にいれるため放火に至る。私は故郷を過去と重ね合わせる。それは18年の間住んでいた記憶であり、前述した、小学校にあるはずのブランコと登り棒、幼い頃に遊んだはずの小川、閉まりきっていたはずの商店、である。懐かしいと思いたいはずの故郷は知らぬうちに変化していく。金閣寺の主人公と私は、二度と手に入らない「空想」を求める。

金閣寺の主人公が現実の金閣寺を放火してもなお、金閣寺を手に入れることが出来なかったように、私が家を火葬しても、私が帰りたかった過去の故郷は手に入らない。でも、だからこそ、可能な限りの手段を尽くして、その空想を大切にしたいと思うのだ。私の故郷はここであると、いつまでも口にしたいのだ。